
魔法世界の陰陽師

おにぎり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法世界の陰陽師

【Nコード】

N7290X

【作者名】

おにぎり

【あらすじ】

小さい頃から病気を患っていた俺は14歳で息を引き取った。闘病生活も終わったしゆっくりしようと思ったが、神様土下座で俺転生！？憑依だろこんなの！！あれ、しかもこれネギま！じゃん。シヤーマンキングの優しいver.ハオさんを目指しつつ、平和で優しい世界のために戦います。

平和をつくる者（前書き）

処女作です。ある程度のことは許して下さい。アドバイス待ってます。

平和をつくる者

うん、死んだな。病室で泣いて励ます両親がいる。

いや、もうこれはダメだろ。父さん、母さん、ごめんな…。

白血病と診断されていた、小さい時から余り遊ぶ事は出来ず病弱だった俺は、両親が買ってくる漫画やアニメに没頭していた記憶があるのは今でも新しい。

『シャーマンキング』幽霊と協力して戦う王道バトル漫画だ。

登場人物も人柄に富んでいて、その中でも興味深い人物が「麻倉葉王」だった。

大人ぶっているが実は子供みたいな性格、多分愛情が足りなかったのだろう…。小さい頃から人を恨み、大きくなつては裏切られる。

そんな人生が漫画の中とはいえ悲しかった。

自分もこんな身体に生まれた事を神様に憎しみという形でしかぶつける事は出来なかったのである。共感した部分があったのかもしれない。

――まあ今更どうでもいいが、今までありがとう父さん、母さん――

すごく眠たいな…。

目の前が暗くなり、光に包まれる。

「ん？まぶしい？」

目の前で初老の男性が土下座している。

「すまなかった。orz」

こんな人に謝られる事をした覚えはないんだが？

「とりあえず頭を上げてください、何があつたんです？」

その爺さんは子供のような笑顔になった。ハッキリ言って気持ち悪い。爺の笑顔とか誰得だよ…。

「怒らないで聞いてくれる？」

「いや、まあ、事と次第によりですが…。」

「お主が幼少から病気にかかったのは儂のせいなんじゃ。」

は？

老人は続ける

「儂の手違いでの、お主を病気にしてもうたんじゃ」

話を聞いていると

1・老人〃神

2・雑務による疲れで手違い、俺白血病＼（＾Ｏ＾）／

もとから神様に見放されてたのか…。

「怒らんのか？」ビクビク

「仕方ないでしょう、わざとじゃないですし。まあ、他人に被害が出なくて良かったです。」

「そ、その、なんじゃ、お詫びと言っては難じゃが転生してみんかの？」

「いやです、しばらくゆつくり休みたいです、闘病生活で疲れてます、誰かの責任で・す・が・ね！！」

「すまぬ、すまぬのじゃあー！。だかのう、お主の様なこちらの手違いによる場合は、速やかに転生させねばならんのじゃ。」

「来世でゆつくりしてくれんかのう。お主の望みも2つなら叶えてやることも可能じゃ。」

コイツ、自分の仕事の為に俺を転生させようとしてないか？でも、まあ…

今までは自分の病弱のために両親が苦勞したんだよなあ。そんな自分に、人が頭を下げているのに断る訳にはいかんよなあ…。

育ててくれた両親なら笑顔で引き受けるだろうしな

「分かりました。転生しましょう。」

「本当か！度々迷惑をかけてすまないのう。」

あつ、一応謝罪の気持ちはあったんか…。

「で？どんなところに転生する事になるんですか？」

「ランダムじゃ！」

…。

「能力は何でもいいのですか？」

「ルールがあつての、2つの事柄は関連しなければならないしの、一つ目は人物像でなければならんのじゃ。」

「つまり、どういう事だつてばよ？」

「つまりの、の 太の容姿で、ジャ アン力は使えんと言つわけじゃ。」

「人物像を元の自分の姿にすると、能力は2つ可能になります？」

「不可能じゃ。お主の存在が消えてしまったのでなあ。新しく設定する必要があるのじゃ。更に、人物像で定めた者の肉体に左右されるため、それ以外はからつきしじゃ！」

あれ？縛り多くね？望み二つも叶わないじゃんw
これ転生ってより、肉体の乗っ取りに近くね？
しかしなあ、一度言つた手前もう退けないしな…

「分かりました。では の容姿で の能力をください。」

「じ、じゃが、それは無茶が過ぎんかのう…？」

「これくらいの融通はしてください。誰かのせいで引きこもりのうえ、知識は殆ど無いに等しいんです。」

「はううつ、そう言われると仕方なしにじゃのう。」

「じゃあ、行ってきます。」

「度々すまぬのう。基本はどこの世界も平行世界じゃから、好きにして構わぬぞい！ではのう。」

再度俺は光に包まれ…

転生した

平和をつくる者（後書き）

不定期更新になる予定です。宜しくです。

大陰陽師――麻倉 葉王――

「イッテエ！」

尻餅をついたみたいだ。

マジかよ冗談じゃねえよ、何処だここ？

見渡す限りの湖と、辺り一面は木、木、木。

水分が補給できるのは唯一の救いだろう。

まあ、結局ここが何処かも分かるはずはなく…。

「仕方ない、とりあえず能力確認からだな。」

立ち上がり湖に近づく俺。

湖に映るのは、あのゴキブリヘアーにマントの少年、そう、あの大陰陽師だ。

今日この日、この瞬間をもって俺はハオになったのだ。

感動をしっかりと噛み締めたところで、神様から貰った持霊、つまり能力なんだが会話とか出来るのかな？

『はい。主の仰せのままに。』

脳内に響くBBAボイス、なんて言うか慈愛に満ちてる、そう、修道女？って言う感じかな…。

マジでこんな声なのかよ。

『え〜と。初めましてだね。俺の名前は麻倉葉王、ハオって呼んでくれるかい？』

『畏まりました、これより私、グレートスピリッツは主をハオ様と

呼ばせて頂きます。』

俺が神様に恩着せがましい言い方をして、多少強引に手に入れた持霊はG・S・そう、全知全能の霊。

コイツは全ての魂の母体にして、帰還すべき場所、平たく言うと天国と地獄の合成体だ。

つまり、宇宙上の知識が全てであると言っても過言ではない。

もちろん、そんなにホイホイ使うつもりはない、漫画のハオ自信もこいつを使って人類滅亡とか考えてたしな…。

俺自信も、こいつから最低限の知識を教えてもらっただけだ。

多分、戦闘で使う事も殆ど無いだろう。

…まあ人が大勢死ぬ時、戦争を止めるとかじゃないと思わないと思うぞ？

上の判断だけで一般人が大勢死んでしまう戦争みたいなのはおかしいと思うんだ…

『早速ですまんが、いくつか質問があるんだが大丈夫？』

『はい、何なりと』

『まず、ここは何処か分かるかい？』

『申し訳有りませんが不明です。私が存在していた世界とは別世界ですので、魂がコミュニケーションに戻らない限りはどうとも言えません。』

成る程なシャーマンキングの世界ではなさそうだな。

『次の質問だ、自分の寿命のコントロールは可能なのかどうかを教えてください。』

『結論から言えば可能で御座います。ですが、私の知る限りの方法のみとなりますのでそれ以外、つまりデータ不足の場合。』

例えばですが、ハオ様の記憶から引用すると、魔法や気功波などはまだ霊がコミュニケーションに来ていないので蘇生が不可能となります。』

『じゃあ、蘇生不可能の場合で死んだらどうなる？』

『コミュニケーションに霊が集まり、その理論が解明するまでは蘇生不可能です。集まり次第の蘇生になりますので、1年〜1万年と期間は不明です。』

マジかよ、結構キツいかもな…。

『ありがとう、じゃあ最後の質問だ。五大精霊はどうなっている？』

『五大精霊は現在地獄コミュニケーションにて、5体揃っておりま。ハオ様のご指示で、何時でも呼び出し可能ですが、もちろんそれ相応の巫力を消費しますのでご注意下さい。』

『分かったよ、わざわざありがとう。もう戻っていいよ。』

『それでは失礼いたします。』

G・S・は消えたがこれかなりチート臭いな…。

ハオの巫力を持つてすれば、五大精霊+G・S・の同時使用とかも夢じゃ無いんだよな。

うん、マジで自制しよう。

結構制限もあるから自由じゃないし。

人が死ぬ度、G・S・の知識が増えて、強くなるってキツいかも…。
人の死〃この世界での自分の強さってさ…

とりあえず、街に出ないと始まらないし、森から出るとなると移動手段がなあゝ。

いや待てよ？今の俺は麻倉葉王なんだよな？

じゃあハオと言えば、G・Sの前にコイツだろ。

本当に出てくるかどうかドキドキしながら、空中の酸素に対象を絞り、巫力を籠める。

「よし！！出て来いスピリット・オブ・ファイア！！！！」

全長約1200cmの赤い巨人が現れる。

いやいやデカ過ぎだろww

「ごめんなファイア、街に出たいんだ、足になってくれるかい？」

ファイアが頷くと手を下げて来た。

それに飛び乗るとファイアが落ちないよう優しく包む。

丁度良いくらいの暖かさだ、原作じゃあ殺人の炎がこんなにも心地いい。

そんな事を考えてながら、今の持霊を使える楽しみを満喫しつつ俺は森を離れて行った。

大陰陽師――麻倉 葉王――（後書き）

皆様お疲れ様です。

正直、ネギま！に優しいハオを突っ込んで、ネギのお兄さんにしてみたい。

と言うことで書き始めましたが、自分で書き始めると感情移入が出来なくなってしまう、妄想を書くようなものになってしまい申し訳ないです（´；；´）

これからも頑張りますので応援して頂ければ幸いです。

こんにちは異世界、俺がハ才だ。

「ありがとう、ファイア」

近くに町が見えてきたので、郊外でファイアを消す。
見られたら大変だしな。

いや、一般人には見えないだろうが、どんな世界か分からない以上は消しておくべきだろう。

平和で暮らせるのが一番だと思うんだ。

けれども、路銀が必要になる訳でーー。

「まあいつか。町に着いてから考えよう。」

とか思ってたんだがな、目算間違ったかな？一時間位歩いたんだがまだ目的地は見えません（泣）。

外に出るのは生まれて初めてなんだから、よく分からんです。

視界に入ってきたのは、西洋風の商店街。

歩き始めて3時間やっと着いたよ／＼。足が棒になるってこういう事なんだろうな。

とりあえず、門のようなところに座り寄りかかる。

「ふう〜。着いた、着いた。」

まずは、ここが何処なのかと、お金の稼ぎ方を考えようかな。

人に聞くのが一番早いんだけどね、14年間も引きこもり状態だった奴が人に聞ける訳が無いんだよなあ。

とりあえず、ここでの通貨単位がドラクマということだけは分かった。

商店街で売ってる声が聞こえてくるしな。
多分あってるだろう。

『ハオ様、ドラクマは古代ギリシャでの通貨単位です。』

オオツ、流石G・S。だなWiki先生だろコレ。
ん？ドラクマだと？ってことはもしかしてこの世界は…。

そんな思考の中、決め手となる商店街を闊歩する人間ではない生き物が目に飛び込む。

うん、多分これ「ネギま！」だな。

間違いない。確定コースだ。

だがしかし、ネギま！の世界となるとこれは相当ヤバイ。

気も魔法もあるのはシャレにならない、死ぬ可能性が格段に上がる。

まあ、路銀を稼ぐ方法はあったな。けどもさ、気ノリはしないし、トラブルも嫌いなんだよ。

でも簡単に稼げるとなると、これしかないんだよなあ————。

SIDE：観客

「さあ始まりました、グラニクス冬季大会ミネルウア杯。第一試合は西方は個人エントリーの新米少年拳闘士。対する東側は今回も優勝を攫ってしまうのか！？魔族のミネリス、炎妖精ファイン！！！」

マントをフードのように被り顔も見せない少年に対峙するのは、人の体に馬の頭蓋骨に羊の角をつけたような魔族と、腕を炎化させながら入ってくる王様のような男。

「新人か、いい余興になりそうだな。いっちょ揉んでやるか。」

「ミネリス、私の手を煩わせるでないぞ？」

「分かってるよ、さあ少年楽しもうぜ！！」

開始の合図とともにミネリスが地面に手をつける。

「ウオオラアアア、いっけエ！！！」

地面から出てくるのは骨の津波、敵を全て飲み込むような津波がマントの少年に襲い掛かるが跡形もなく燃え消えてしまう。

「焼かれた！？チィ、これならどうだ！！」

ミネリスと背後に槍のような大きな骨が5本浮かんでいる。「パキパキ」という音とともに、槍に螺旋状の模様が刻まれ高速で少年に投擲される。

が、それでもダメ、槍は少年にぶつかる前に燃やされる。

「ミネリス、敵は炎か、長丁場は厄介だ私も出よう！一気に決める、気を惹きつけておけ。」

「さっきと言ってること違いじゃねーか、まあ仕方ねえな、まかせ

ておけ相棒。そういうことなら、出し惜しみは無しだ！！こいつならどうだオラァァ。」

丸い玉のような大きな骨の塊が空中から落下してくる。
逃げる隙など与えない巨大な塊…

「弾けるオ！！」

その一言ともに、空中で骨が弾け、鋭い骨片が雨のように少年を攻撃する。

おそらくこれは彼にとっては最高の技だろう。

平原で放てば間違いなく地形は変わるであろうし、このコロシウムにも結界がなければ、闘技場自体に影響が出る次元の技だった。

しかし、その大量の骨片もあざ笑うかのように炎に包まれる。

「これでもダメとか、お前何者だ！？けどな、時間は稼がせてもらったぜ。行けエ相棒！！」

「来たれ深遠の闇、燃え盛る大剣！！闇と影と憎悪と破壊、復讐の
大焰！！我を焼け、彼を焼け、そなたは焼き尽くす者、『奈落の業
火！！！！』」

奈落の業火が少年を焼き尽くそうと迫る。そして少年は初めて言葉を口にした

「ちつちえな。」

ただ一言、たった一言だった、その一言で会場の空気が変わる。と同時に奈落の業火は別の炎に吞まれ消えた。

いつからだろうか？フードが落ちた少年の後ろには大きな赤い巨人

がいた。

そして少年が続ける。

「最終通告です、棄権してくれませんか？手加減はできません。」

「棄権だと！？ふざけ！待てミネリス！！棄権だ棄権しよう。」何を言ってる…」

「私も自分の目を疑ったが、精霊であるがゆえに私には分かる。あれの巨人は、我々が神と崇めているであろうものに近いような存在だ、どんな炎攻撃も通用しない上、ただただ焼き尽くされるであろう。少年よ我々は棄権する。長くなってすまなかったな、失礼する。」

「オ、オイ待てよ！！ビビってるんじゃないよファイン！！てめえもだ、まだ勝敗は決まってるぞーぞー！防御ばかりの奴に棄権を促されて、ハイ、ソウデスカ。なんて言える訳ねーだろうが！！せめて納得いく力を見せてみる。」

「燃やせ、スピリット・オブ・ファイア。」

嫌そうに少年が一言呟くと、コロシアムの結界が燃えた…いや、碎けたというべきか、会場を守る強固な結界を少年とその従者のような赤い巨人は呼吸をするように、結界を砕いた。

力の差は歴然だろう、それを悟った魔族もおとなしくなり、会場から退いていく。

そうして退場する二人を見つめる少年がただ一人闘技場に立ち続けた。

SIDE
OUT

こんにちは異世界、俺がハオだ。（後書き）

いやはや、何か主人公が別キャラみたいって言うのは無しでお願いします。自分でも分かってたんだ（・・・）

次話は会場でのハオの心情と、時間軸、新たな出会いについて書いてみたいと思います。

作者自信未熟なので文面アドバイス等、ドシドシ頂けると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7290x/>

魔法世界の陰陽師

2011年10月23日19時12分発行